

井上えり子(鳥取大)

**目的** 本研究の目的は戦前期に文部省によって実施された「師範学校中学校高等女学校教員検定試験」(通称「文検」)の家事科(「文検家事」)の試験内容を解明することである。

**方法** 「文検家事」は1891(明治24)年から1943(昭和18)年まで実施されたことが確認されている。この間の試験問題のうち入手できた647題を対象とし、次の4つの視点から出題傾向の変化を分析する。①検定委員の構成、②背景となる学問の発達、③中等教育の拡大、④社会の経済的・政治的状況の影響。

**結果** 検定委員の構成からみると、試験内容は次の3つの時期に区分できる。Ⅰ. 成立・形成期(1893～1911年)、Ⅱ. 展開・発展期(1912～1926年)、Ⅲ. 安定・終焉期(1927～1943年)。Ⅰ期は野口保興、後閑菊野、佐方鎮子が主に検定委員を務めた時期である。この期に中等教育を受けた女生徒の多くは上流層に限られており、試験内容は豪華な饗応料理の献立作成にみられるように上流層に対応した設問が多い。Ⅱ期は近藤耕蔵、井上秀子、甫守ふみ、大江スミなど10人を超える家政学者が交替で検定委員に就任した時期である。この期は食物関連の出題が増加し、飛躍的に発展した栄養学の成果が試験問題に反映された。また、中等教育の拡大に伴い、中流層に対応した設問が主流を占めるようになり、当時の経済不況や生活改善運動など社会経済的設問が出題された。Ⅲ期は近藤耕蔵、井上秀子、西野みよしが検定委員を務めた時期である。この時期の設問は大きく科学的、経済的・社会的、実用的内容に分類され、出題傾向は安定していたが、戦時体制に伴い戦争を反映した設問が出題された。戦局の悪化により「文検」は中止に追い込まれ、戦後廃止された。